個人的彫刻作品から制作の場を拡大

芸術・鞍掛 純一准教授

美術学科で彫刻を専門とし、鉄による作品を主に制作している。以前は昆虫や動物など具象的なものを作っていた。最近は「工業製品の鉄に手を加えることで、生きたものに変わっていくところに魅力を感じる。面白い形を追求していくと、言葉では説明できないような、抽象的な作品が多くなってきた」と話す。研究室に置かれた作品の中には、石を磨いて丸みを持たせたようなものもあり、鉄のイメージからかけ離れた、暖かみを感じさせる作品が多い。

「個人の感性や感覚を大切にしたい」と語る鞍掛准教授は、学生に感覚的なものを伝えるにはどうしたらいいかを考えた。そんな折、2004年に、アートによる地域活性化を目指す「大地の芸術祭 新潟妻有アートトリエンナーレ2006」に参加する話が舞い込んだ。その芸術祭を、コミュニケーションをテーマとしたアートを実践する場として選び、学生たちに「一緒に制作しよう」と参加を呼びかけた。

鞍掛准教授の研究室には鉄で作られた作品が随所に置かれている

新潟妻有とは、新潟県十日町市と津南町からなる、自然と人間が共に暮らす「里山」が今も残る地域。3年に一度、国際美術展「大地の芸術祭」が開かれている。この地域の中でも、松代地区の峠という30軒ほどの集落にある空き家に目をとめ、その家を作品にすることに決めた。

大地の芸術祭 空き家をアート作品に

自然を生かし地域再生に貢献

作品は「脱皮する家」

峠の集落は日本の原風景と言われる「棚田」があることで知られ、半年間は雪の中で暮らす豪雪地帯。そこにあった空き家を選んだのは「土地の人にとっての景観を壊すことなく、空き家を利用することで人がまた帰ってくる」という理由から。ただ、築200年ほどの古民家は、外壁はトタンで覆われ、内部は改築が重ねられ、想像以上に朽ちていた。そこで、まず構造上必要なもの以外はすべて解体し、元の家の状態に戻すところから作業は始まった。その後、天井の梁や柱、壁や床など、あらゆる木の部分を「彫る」ことに専念。道具は彫り跡の鋭い三角ノミだけを使用した。

彫り始めて約1年、片付け作業も含めると2年半の月日を要した作品は「脱皮する家」と名付けられた。この作品には彫刻コースの有志約10人を中心に60人ほどの学生（卒業生を含む）が参加している。また、家の制作に取りかかる前に新潟中越地震が発生し、震災ボランティアの活動なども体験したという。

「古民家の構造が彫るという行為によって浮き彫りにされ、家の機能も復活させた」と話す「脱皮する家」は人気が高く、多くの人が訪れている。完成後は地元住民との交流も深まったことから、09年の「大地の芸術祭」では、すぐ裏手にあった空き家を借りることに決めて「コロッケハウス」の制作に取りかかった。

「溶射の技術を用い、亜鉛とアルミの金属で覆って銀色にし、家全体をオブジェと考えました。窓が印象的だったのでサッシを抜き、家の機能を取り払い、形だけを見たときに作品となるように加工したものです」

このときは建物だけでなく、周囲の土地の整備も行っている。裏手の道を直したり、畑を耕したり、草むしりや池を作るなど、周りの景観もよみがえらせた。

「越後妻有アートトリエンナーレ2009」の作品「コロッケハウス」

次回作は鉄製の舞台

今年7月29日～9月17日に開催される「大地の芸術祭」に向けて6畳四方の農舞台を鉄で制作。「芸術学部創設90周年記念事業で、江古田の中庭で舞劇『竹取物語』を上演し、そのときに鉄の舞台を作りました。これを土台から新潟に持っていきます」と話す。

また、これまでと同様に、同学部の映画学科や演劇学科など8学科の学生も参加し、「舞台を通じて総合的な取り組みをしたい」と考えている。さらに芸術祭が始まるまでに、棚田の風景をはじめとする峠集落の自然や、地元の婦人が作る食事のレシピを入れて「今ね」どきのカフェご飯風」にしたり、集落の人々とのふれあいなどをまとめて「峠の本」も作る予定だ。

「私自身は一方で個人の鉄の彫刻作品を制作し、一方で地域との関わりを続ける。人とふれあいながら地域再生に役立つ作品を作りたいです」

プロフィル

鞍掛 純一（くらかけ・じゅんいち）平成2年本学芸術学部美術学科卒。4年同学部芸術研究所修了。補助員・非常勤助手・講師、武蔵野美術大学造形学部特別講師、本学美術学科助手・専任講師を経て19年から現職。5年にときわ画廊で個展を始めて以来、グループ展等に出品。越後妻有アートトリエンナーレ等の展覧会に出品。著書「脱皮する家の本」「コロッケハウスの本」。東京都出身、44歳。

細胞生理学から地域活性化の特産品作りまで

短大（三島校舎）室伏 誠教授

山積みの資料に囲まれる室伏教授の研究室

昨年6月に静岡県三島市で開催された「第6回食育推進全国大会」（内閣府など主催）を取り仕切ったり、ここ数年は静岡県の「健康づくりフェア」など県内各地のイベントに関わる一方、地域の特産物作りの相談にのって東奔西走する室伏教授。ただし、その原点は細胞生理学にあった。

大学院の修士課程修了後に教授から紹介されて、立ち上がったばかりの北里大学水産学部の魚類生理学研究室の助手を3年間。その後、本学に戻って三島で研究生活を再開できたのも、魚類から動物までの解剖や動物実験の補佐をこなすというその面での基礎があったからである。

三島キャンパスは、広い駿河湾の中でも、沼津沿岸の内浦湾に近い。赴任当初からさっそく魚類にエビやカニなど甲殻類の種分化や種の同定に関する研究に取り組んだ。手法は細胞の核内に存在する染色体の数や形から種間を比較する細胞遺伝学の分野。1970年代頃から大きな話題となったバイオテクノロジーの基礎として、注目されていたところである。

魚市場や水族館通い

短大での授業を終えてからは、近くにある国立遺伝学研究所に通って研究を重ねる毎日で、書き上げた論文は30点を超える。中でもカワハギに複合性染色体があるのを発見した昭和55年発表の論文は、その後の魚類や甲殻類の染色体研究ラッシュの口火を切ったものとして高い評価を得た。

一方で研究材料を求めての魚市場や水族館通いは、地元の漁業関係者らとの交流を深める。また静岡県にとって水産物の加工生産が主要産業なだけに、それに関する調査依頼が増えてきた。

最初に依頼があったのは、沼津市の干物業者の組合。干物の材料として世界中から送られてくる魚のうち、よく分からない種類の魚を調べてほしいとの要請が、度々寄せられるようになった。

これらは得意とする分類研究の範疇。さらに調査の内容自体が次の研究のタネにもなった。それから最近まで日本中の干物材料調査を続けた。続く依頼は地元の市町からで、今度は地域の水の成分などの環境調査。こちらも学部生時代に取り組んだ上野動物園での水質検査の経験が生きた。

カワハギの複合性染色体を発見

研究対象が食物全般に拡大

地元企業と連携し新商品を開発

そうこうしているうちに、持ち込まれる対象も魚から野菜など食物全般に広がり、依頼先も各方面へ拡大。さらに食の安全・安心や食育教育という話題とマッチして、取り組むテーマ自体が大きなものになっていった。

室伏教授は5年前、ゼミの学生らと地域特産品プロジェクトを立ち上げた。地域の活性化を期待する地元企業らと連携し、富士山の湧き水や三島産のメークイン、サツマイモ、黒米などを学生と一緒に栽培。これらを材料にさまざまな和洋菓子の新商品を開発したが、ガトーショコラはNUBICにも登録した。ここ3年はゼミ学生と栽培した農産物を使った「日大たくあん」や「日大食菜みしまコロッケ」も好評だ。

緑茶「富士姫」が金賞

所管の食物栄養学科は栄養士教育に主眼を置いた本学でも唯一の学科。同プロジェクトも食の専門家育成に向けた、ビジネス感覚を含めた実践的トレーニングの一つであるわけだ。

成果の一つは、静岡産の茶葉3種を合組みして、若い女性に好まれる味を目指して開発した緑茶「富士姫」となって結実した。世界緑茶コンテストで3年連続で金賞を受賞したのである。

日本全体が不景気な中で、消費の低迷が続いている。その理由の一つが、若者世代の消費の落ち込みにある。このため売れ行き不振にあえぐ提携企業にとっても、アンケート調査を重ねて若者の嗜好を探り、売れ筋の製品開発に生かしていく手法は垂涎の的である。

緑茶に続き、日本酒についても、「サッと飲めてスーっと入るのが若者の好み」との調査結果を元にしたお酒作りが酒造会社との間で進行中。ウナギで有名な三島だが、廃棄されていたウナギの骨を使ったクッキーなどを考案して、カルシウム補給に一役などという案件も持ち込まれた。

「学生ら若者の持っている潜在能力、資質を生かす場として、今後もゼミを大いに活用したい」と教授は意気込んでいる。

ゼミ生らと新たな特産品作りの打ち合わせを進める室伏教授

プロフィル

室伏 誠（むろふし・まこと）昭和48年農獣医学部水産学科卒、50年大学院農学研究科修士課程修了。北里大学水産学部魚類生理学研究室の助手となり、翌53年に本学短期大学部家政科の助手へ。54年専任講師、58年助教授を経て、平成3年に生活文化学科（現食物栄養学科）教授。専門は細胞遺伝学。日本遺伝学会、日本染色体学会、日本魚類学会、日本水産学会などに所属。東京都出身。61歳。